

寫眞の斷捨離

赤谷慶子

斷捨離の中にもそれは最も思ひまどふ。人は皆若かりし頃は寫眞撮らるる事に無頓着なり。加齢とともに、容姿うつろひ行けば寫眞撮らるまじ、といふ心境になる。

來る秋の引越しに備へ、吾斷捨離を実施したれど、服や靴は易し。ある團體に「古着でワクチン」といふ事業のある事を知る。四千圓近き二十キロの容量のある袋購入し、そこへ服靴の類を入れて通告すれば集荷に訪るるあり。服も靴も疲弊甚だしからぬはさながら賣却しワクチンに代はる。賣るを得ぬはやがて途上國へ送る、といふ事業なり。なほ清げなる服や靴を捨つるは忍び難き所なれど、何かの役に立つと思へば惜しげなく斷捨離叶ふ。かくの如くにして三袋は處理せられたり。爾來仕事着なりしスーツ類、バッグ、ハイヒール等はこの期に及びてはもはや用ゐざるべし。スーツ五十着は處分するを得たり。かかるハイヒールにて仕事に奔走せるなど、信ぜられず。

寫眞は思ひいで等とかくあれば、斷捨離するは難けれど、友人テレビ番組にて見し寫眞の斷捨離方法の名案ありきと報せ來たれるあり。アルバム一冊を買ひ、是非とも残したき寫眞のみを、例へば廿枚のうち一枚選擇し、それを貼る。かくてその他の十九枚は廢棄す、といふものなり。何處なりと旅行したる思ひ出の寫眞は、數十枚のうちより一、二枚をアルバムに残し、餘は廢棄せむとす。かくの如くにして膨大なる寫眞集を廢棄せむと現在奮闘中なり。仕事にまれ私事にまれ、よくぞかくは海外旅行せしものと思ひつつ、おほかたを捨て去りき。

おのれにとらばやむごとなき物にあふとも、残されたる家族にとつては「芥」にしかぬなり。無責任なる老人になる事は避けたしと、なるべく物を残すまじき努力せばやと思ひそめき。

(令和三年八月三十日受附)